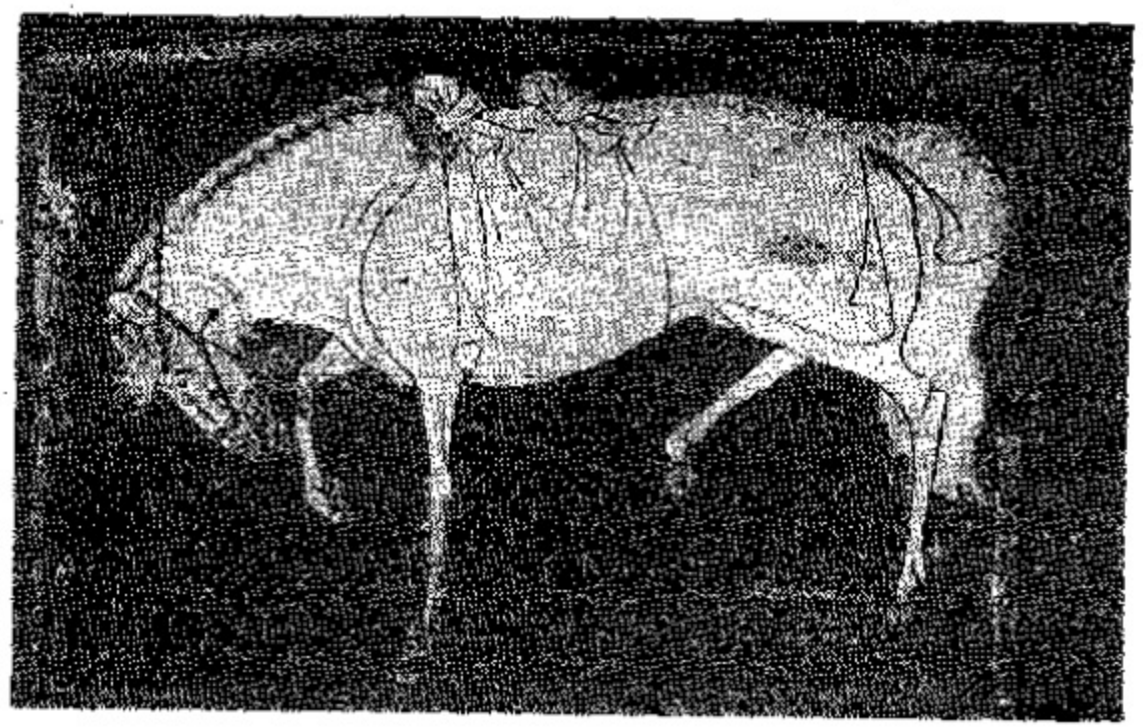
伝説によると、寛文の頃（一六六一―一六七二）矢嶋藩の家老金子久左衛門尉の二男想七というものこの『とちケ沢』に田地を開墾していた。或る春日和の日のことであるが、木陰で昼食をして休んでいると、ポカポカ暖かいのに遂快い気持になって昼寝をした。ところが雀かと思うような大きな蜂が飛んで来て忽ち想七の鼻の穴に這入り込んでしまった。想七驚くまいことか、アットはね起き夢中になって両手で鼻をなで擦ったところ、その蜂は鼻穴から飛び出して、見る見る前山の洞穴の中に飛び入ってしまった。想七は狐にでもつままれたような妙な顔つきで、トホンとしていたが、さて不思議なことがあるものと、思案にくれていたが、なんとそれは一瞬の夢であったことがわかった。



白馬の絵馬

そこで想七は、これはただごとではない、これこそ神のお告げというものだ、あの洞穴には神様が宿っているに相違ないと信じ込みその神こそ、狗留孫仏大権現と称えて、崇敬信仰したのがこの神社の起源であると伝えている。そのため社殿の様式も、この様になっているのである。

又この神社にこのようなことがある。お宮の下の田圃にいる蝗は神の使の蝗で、他の田圃を荒す蝗を追い払ってくれるといって、参詣人は、四・五匹づつ捕えて帰って、自分の家の田圃に放し、来年お参りに来る時に、自分の家の田圃から、借りた数だけの蝗を捕えて行って、お宮の下の田圃にお返しすることになっている。又お宮の縁の下の土を一握り程いただいて戻り、自分の田圃の一水口に撒いて豊作を祈るということもある。この時境内の笹も折りとって帰って、『神のやどり』として一水口に立てたりした。